

2026 年小教区評議会役員研修会報告

■テーマ： サイクルテーマ③「社会への福音宣教」

「貧しい人々への愛から、社会の中で福音を生きる」

～教皇レオ 14 世の使徒的勧告『Dilexi te わたしはあなたを愛した』～

■対 象：ブロック担当司祭、協力司祭、司牧担当者、小教区評議会役員

■講 師：大塚 喜直司教(京都教区司教)

■日 時：2026 年 5 月 16 日（土） 14：00～15：30

■開催方法：オンライン(ZOOM ミーティング)

■参加端末：総端末数 70 (1 端末から複数人数の参加あり)

■内 容：教皇レオ 14 世使徒的勧告『Dilexi te わたしはあなたを愛した』から社会に向けての福音宣教のメッセージを学ぶ。

大塚 喜直司教 講話 要旨

講話は教皇レオ 14 世の使徒的勧告『私はあなたを愛している 貧しい人々への愛について』を念頭に進める。今年の司教年頭書簡も併せて読み直してほしい。

1. 社会への福音宣教とは何か

福音宣教とは、教会の中だけで行われる特別な活動ではなく、家庭・職場・地域社会など、私たちの日常生活の中で愛を生きることである。祈りやミサ、聖書の言葉は、社会の中で人を大切にする具体的な生き方へと結びついていかなければならない。

2. 「貧しい人々への優先的選択」

「貧しい人々への優先的選択」は教会の大切な視点である。ここでいう「貧しい人」とは、経済的困窮者だけではなく、孤独な人、傷ついている人、差別されている人、障害や病気を抱える人、外国籍の人など、社会の中で声を上げにくい立場に置かれているすべての人を含む。教会は、そのような人々を単に「助ける対象」としてではなく、キリストと出会う場所として受け止める必要がある。

3. 連帯とは「共に歩む」こと

「連帯」とは、上から助けることではなく、苦しむ人を自分とは無関係とせず、共に歩もうとする姿勢である。具体的には「声をかける」「話を丁寧に聴く」「必要な支援につなぐ」「安心して集える場所をつくる」といった小さな実践の積み重ねが、社会への福音宣教になる。

4. 役員の役割と共同体づくり

役員の役割は、単に教会の運営や管理ではなく、「共同体がより福音的になるよう支えること」である。役員会や部会、委員会は、情報共有や決定だけでなく、「神が何を望んでおられるか」を共に識別する場である。

まずは役員として「教会は初めて来た人にとって入りやすいか」「見えにくくなっている人はいないか」「安心できる場になっているか」という問いを常に持ち続けてほしい。

5. 誰もが安心できる教会へ

外国籍の信徒や高齢者、障害のある方々への配慮について、SNS や翻訳機能の活用、多言語での情報提供、バリアフリー化など、教会が誰にとっても安心できる場となるための工夫を続けてほしい。また、教会の中に知らず知らずのうちに「冷たさ」や「閉鎖性」が入り込んでいないかを見直してほしい。

6. 小教区への問いかけ(秋の交流会に向けて)

「私たちの小教区で見えにくくなっている人は誰でしょうか。」

「その人が安心して集えるために、役員として何から始められるでしょうか。」

質疑応答

Q. 外国籍信徒の役員養成プログラムについて。

A. 現状は日本語中心の研修であるため、今後多言語での研修や情報提供、SNS や AI 翻訳の活用など情報供給の工夫をしていきたい。

分かち合い

■ 精神的な困難を抱える人との関わりの難しさについて、善意で関わっても、必ずしも良い反応が返ってくるとは限らず、現代社会におけるコミュニケーションの難しさを感じている。

司教コメント 誰もが一人ひとり違う存在として共に歩むことが大切だ。また、個人だけで抱え込まず、複数の人で支えることも大切。

■ 病者訪問を続けている信徒グループの活動が教会に来られなくなった人々の状況を知るきっかけとなっている。

司教コメント 教会に来られない人だけでなく、家庭や地域、職場の中で忘れられている人々にも目を向ける必要がある。

■ フィリピン人信徒をはじめ多国籍の共同体づくりについて、「インターナショナルな教会」を目指して交流を深めたい。

■ 認知症と思われる信徒への対応について。教会だけで抱え込むのではなく、地域の福祉機関や支援グループとつながることで、新たな支援の道が見えてきた。

司教コメント 日本の小教区は信徒が広範囲に住んでいるため、地域との連携が難しい面もあるが、「つなぐ人」の存在が非常に大切だ。

大塚司教コメント 小さな一歩から始まる福音宣教

「神は小さなものを通して働かれる。」特別な力や知識がなくても、目の前の一人を大切にするとところから福音宣教は始まる。

「気づくこと、聴くこと、つなぐこと、祈ること、共に歩むこと」が、今日から始める社会への福音宣教である。

企画室ふりかえり

分かち合いの中で様々な小教区から現実的な課題が出された。高齢化による支え手不足、就職氷河期世代の貧困や生き辛さ、ストレスによる心身の不調など日本社会の抱える問題が教会の中に深く入り込んでいる現状がある。教会の中で社会の課題に向き合う必要性がある。

教会内で孤立している人、見えにくくなっている人に気づき、耳を傾け、ともに歩むこと、それをそのまま社会の中で実践することが社会に向けた福音の第一歩となることが見えてくる研修だった。

外国籍の信徒が役員を担っている小教区が増えてきたことから研修会の多言語対応が今後の課題である。